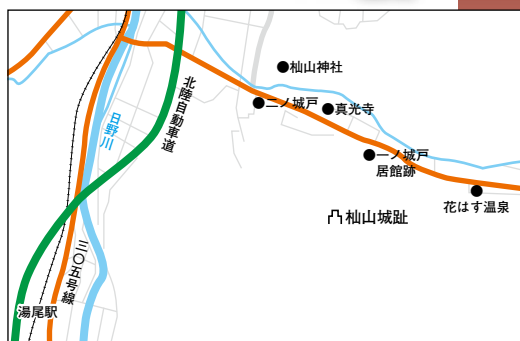
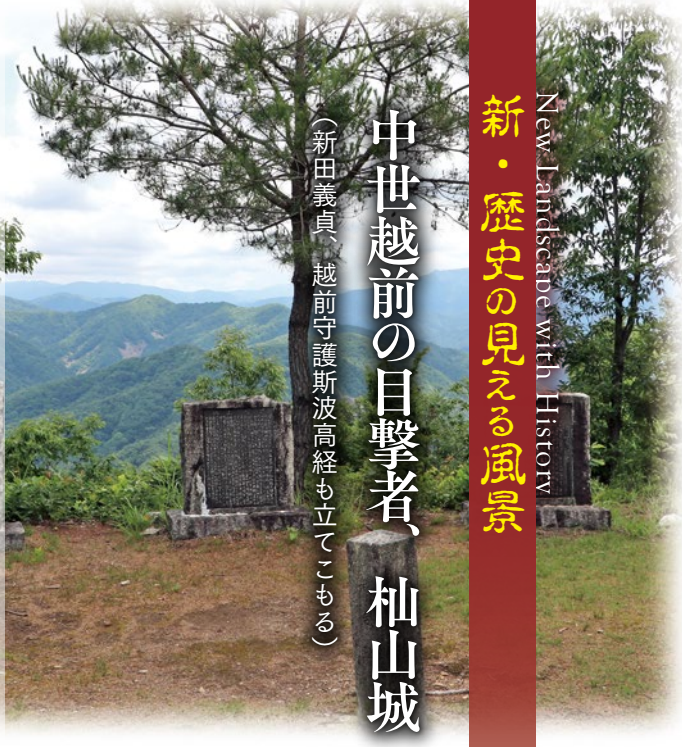


# 中世越前の目撃者、 杣山城

(新田義貞 越前守護斯波高経も立てこもる)



南北朝から戦国末期の一向一揆まで、中世の越前の歴史に深く関わった「時代の目撃者」杣山城は、南越盆地の南端に位置し、側には日野川が流れ、北陸道が通る交通の要所にある。築城は鎌倉末期に在地の瓜生氏によるとされるが、当時は些程度の小規模なものと考えられ、後の南北朝の新田軍（南軍）と越前守護の斯波軍（北軍）との戦闘下で徐々に整備が進んだと考えられる。

建武2年に足利尊氏は後醍醐帝に反旗を翻した。これに対して新田義貞は天皇側の中心として戦い、一時は尊氏を九州に追いやったが、その後尊氏との戦いに敗れる。翌年、後

醍醐帝が尊氏に降ると、義貞は恒良親王を奉じて斯波高経が守護の越前に逃れた。義貞は敦賀金ヶ崎城に立てこもり抵抗、落城に追い込まれるも、義貞本人は杣山城に脱出し、ここを拠点に斯波軍（北軍）に抗戦、反撃に転じ、一時は新田軍（南軍）が優勢となった。しかし、義貞は足羽七城を中心とした藤島の戦いの最中、灯明寺瞭での斯波軍との遭遇戦で敗死、その後杣山城も北軍の手に落ち、越前は北軍が制圧した。

2代将軍足利義詮の時代になると、斯波高経は、家格の高さ（当時「第一の家格」といわれた）を背景に、13歳の四男義将を将軍執事とし、自

本丸から西方の西御殿、その間には複数の堀切なども残る



杣山神社南の二ノ城戸付近、壕跡も残る



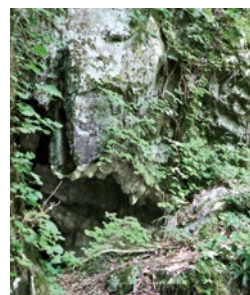
ら幕政を管領した。高経は、三条坊門に將軍邸、近くの三条高倉に自邸を新築し、戦乱で荒れた京の復興に取り組んだ。しかし、この過程で高経の専横が目立つと、諸將の反感も強まり、反高経勢力が結集し圧力が強まる。貞治5年8月に高経は將軍義詮に別れの挨拶をし、三条高倉邸に火を放ち、叛意を示して越前に下り（貞治の政変）、杣山城（義將は栗屋城）に立てこもった。幕府は、山名、土岐、畠山、京極、赤松など諸將の大軍を派遣し杣山城を包囲。

斯波高経が在城し、幕府の有力守護大名の大軍と対峙したことで、杣山城は一段と拡張整備されたと考え

られるが、ここでの大きな戦闘はなく、1年後に高経が城内で病没すると、子の義将は上洛し將軍から赦免を得る。その後、斯波氏は三管領筆頭（越前・尾張・遠江守護）として幕政に深く関与することとなる。

この後も杣山城は、斯波氏の執事甲斐氏の一族が城主を務め、朝倉氏の時代や一向一揆でも利用される。現在、城跡は城山と山麓の一部も含めて国指定の史跡となっており、山頂の本丸を中心に東西に東御殿・西御殿と呼ばれる曲輪が築かれ、山麓には土塁（一ノ城戸）や居館跡、周辺には二ノ城戸跡や壕の一部が残っている。

(文 奥山秀範)



勾当内待（義貞妻）が隠れた伝承が残る姫穴



西御殿付近の殿池、貴重な水源